

2020年12月6日(日) メッセージアウトライン 「主の母、マリアの賛歌」

聖書箇所：ルカ1：46～55

タイトル：「主の母、マリアの賛歌」

テーマ：ガリラヤのナザレという寒村に住む一人の処女（おとめ）マリアに与えられた祝福は、時を経て現在に至るまで、人類すべてに与えられた最高の祝福である。

マリアが聖霊に満たされて、主なる神をほめたたえているのが本日の聖書箇所である。

自らを「幸いな者」と受けとめたマリアという処女を、神がイエス・キリストの母としてお選びになった理由、マリアにとって真の幸いとは何だったのか、マリアの受けた祝福は私たちに同様の祝福をもたらしているのか。アドベントの第二週目を迎えて、マリアの賛歌をとおして、クリスマスの恵みを共に味わっていきましょう。

1. 処女マリアの驚きと戸惑いと信仰（ルカ1：26～38）

①受胎告知（28～33節）

御使いガブリエルから突然、マリアは聖霊によってみごもって主の母となることを告げられた

②マリアの驚きと戸惑い（29節、34節）

*御使いの告げた言葉の意味が理解できなかった

*婚約はしているが夫婦関係に入っていないので、子どもを産むことなどありえない

③マリアの信仰（38節）

*御使いは親類のエリサベツが高齢で、しかも不妊の女と言われたのに子を宿している事実を告げ、「神には不可能なことは何もありません」と宣言した

*マリアはここで全能の神に信頼して、自らを主のはしためとして捧げ、神のことばをそのまま受け容れた。当時の女性も聖書に精通していたことが伺える

2. 主への賛歌（聖霊に満たされたマリアの賛歌）

①マリアの感謝と喜びの発露として

*この卑しいはしために目を留めて下さった（マリアの謙遜さ）

*力ある方が大きなことをしてくださった（主への確たる信頼と喜びと感謝）

②主のご性質とみわざのゆえに

*「その御名は聖なるもの」（聖なる神）

*「主の憐れみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます」（あわれみ深き神、とこしえに変わらない神）

*「主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました」（高ぶる者を退けられる神）

*「権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました」(身分の低い者、貧しい者を顧みてくださる神)

③主のご真実と約束の確かさのゆえに

*「主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けて下さいました」(神はご自分がお選びになった民にあわれみを忘れず、彼らを贖い助けてくださるお方)

*「私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに」(約束を必ず成就してくださる真実な神)

3. 「幸いな者」 マリア

神の子、救い主イエスを産んだマリアの人生は「幸い」だったのか？

①イエスの肉の家族

*夫ヨセフ、イエスの弟たち(マルコ6:3) 妹たち

②イエスの母からイエスの弟子へ

*カナの婚礼を分岐点として、公生涯に入られたイエスとの関係の変化

*「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです」(ルカ11:27、28)

しかし、イエスは言われた。「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです」

*愛する息子イエスの十字架の死に直面して

・「イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた」(ヨハネ19:25)

・イエスは十字架の上から愛する弟子(ヨハネ)に母マリアを委ねられた

*その後のマリア(使徒1:13、14)

・イエスの復活と昇天のあと、「エルサレムを離れないで、父の約束を待つようにと言われたイエスの言葉に従って、イエスの母マリアとイエスの弟たちはイエスの弟子たちと共に祈っていた

*この時のマリアは「イエスの産みの母」という立場から、イエスを神の子、救い主と信じる一信者としての関係に変えられている

4. 結論

聖霊に満たされたマリアの賛歌は、「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。」と喜びに溢れている。この後のマリアの生涯は苦しみと悲痛の中にも、まさに救い主イエスを産んだ母として、さらに自らがイエスを神の約束のメシアと信じ従う者とされるまでの祝福の極みを預言した賛美となっている。私たちもマリアが生んだ子イエスを心から救い主として信じ救われた。そして、イエスの福音を伝えて、新たな霊の子どもを生み出す者とされていることを喜ぼう。このクリスマスの喜びを伝えよう！